

1

1 日本人はなぜ英語が下手なのか——その1 動機づけ

いて振り返ってみたい、という方には学習者の立場から、また外国語を教えている先生方や、外国語教育に携わりたいという希望をもっている読者の方などには教師の立場から、本書に興味をもっていただけたらと思います。

本書の構成は以下のようになっています。まず、第1章と第2章で、日本人はなぜ英語が下手なのか、という問題に答えます。第1章では学習動機の弱さ、第2章では日本語と英語の距離、という要因をとりあげて、日本人の英語下手をそれぞれ説明します。第3章では、外国語学習にどんな学習者が成功するか、年齢、性格、適性など、いくつかの要因についてその影響を論じます。第4章では、第一言語習得におけるメカニズムについて、これまでにかつていっていることを説明します。第5章では、効果的な教授法・学習法の問題を、第二言語習得研究の歴史をたどりながら検討します。最後に、付録として、今までの研究成果から、外国語学習のときに気をつけるべきことをまとめてみました。

それでは、第二言語習得研究の世界へ、ようこそ。

日本人はなぜ英語が下手なのか。この問題についてはいろいろな意見があります。そもそも本当に日本人は英語ができないのか、という問題もありますが、たとえば、北米の大学に留学を希望する学生の英語力を測るため、国際的に標準化されたTOEFLというテストの結果をみると、日本は最下位に近く、またこの二〇年間、成績は向上していません。誰がこの試験を受けているのか、という問題もあるので鵜呑みにはできませんが、あまりできないことには異論はないでしょう。では、なぜできないのでしょうか。

数年前に、第二言語習得の研究者として憤慨したことがあります。ある高名な日本の言語学者が、「日本人が英語が下手なのはこれこれこういっただけ」と「一っだけ」理由をあげていただけです。そして、それにもとづいていろいろ偉そうなことを言っているのです。その一つというのが何の理由だったか忘れてしまいましたが、それはここで

動機づけはどこからくるか

外国語学習の動機づけはさまざまです。日本人の英語学習の場合は、ほとんどが学校の教科として始まるので、学校でよい成績をとりたい、という一般的な動機がまずあります。また、英語はほとんどの場合、入試の科目として避けて通ることができないため、その点でも、学習動機は高くなるでしょう。

一方、数学などの教科と違い、外国語というのは、根本的にはコミュニケーションの「手段」です。そのため、外国人とのコミュニケーションの手段として使えるように上

語屋は出世しない、英語はできないで通訳を使う人が出世する」といった話もありました。今も、実際問題としては日本では英語が必要ない。ところが、フリーピンなどに行くと、英語ができれば社会の中で不利な扱いを受けます。タガログ語などのフリーピン言語と英語も、日本語と英語との関係と同様になり違っています。本人よりもフリーピン人のほうが英語ができるのは、学習者にそれだけのニーズがあるからです。インドでも似たような状況があります。

この章では、「動機づけ」がいかに外国語学習の成功に関わっているかを、第二言語習得研究の成果を通してみていくことにしましょう。

動機づけが低いと外国語学習の成功は不可能

さて、日本人が英語ができない、もう一つの大きな理由は、動機づけの弱さです。つまり、日本にいれば、英語が使えなくても実際問題としては困らないのです。最近では日本でも英語が使えたほうがいいという状況はありますが、じゃあ使えなかったら困るかという点、ほとんど困りません。日本国内では日本語によるメディアが非常に発達していますから、最前線のかなり多くの情報が日本語に翻訳されています。また、日本は科学そのものがかなり発達していますから、英語でなくても、最新の成果もある程度は読めます。

ちょっと前までの日本では、英語ができる人は「英語屋」などといわれました。「英

は重要ではありません。

そんなことは、第二言語習得を研究している者からみれば、たくさんある理由のうちの一つに過ぎないわけです。日本人が英語ができない理由はたくさんあります。大きな理由の一つは、英語と日本語がどれほど異なっているか、という言語間の距離の問題です。つまり、日本語と英語が非常に異なっているのので、日本語を母語とする人にとって英語は難しい、ということです。これについては、第2章で詳しく論じます。

ナーは学習者のこのような志向を「統合的動機づけ」とよび、この仮説を支持するいくつかの研究を発表しました。簡単にいえば、学習対象言語の話者に好意をもっている学習者が外国語学習に成功する、ということです。

これは直感的にはありそうなことです。たとえば、中国で公用語として話されている中国語(北京語)を学ぶか、香港で話されている中国語(広東語)を学ぶか、という問題を考えてみましょう。香港滞在中のある日本人は、中国政府に対して反感をもっているから北京語は勉強する気がしない、と言っていました。同様に、アメリカ、イギリスなどから好意をもっている人の英語を学ぶ意欲は高そうです。『冬のソナタ』で韓国に興味を持てば、韓国語学習にも熱が入ります。

しかし、外国語学習の動機はそれだけではありません。ガイドナーはもう一つ、実利的な利益を求めて学習する動機をとりあげ、「道義的動機づけ」とよびました。たとえば、その外国語ができれば就職に有利になる、金銭的利益がもたらされる、といったことでです。外国語を、何か実利的な目的を達成するための「道具」としてとらえるのです。前に述べた日本の状況に照らしていえば、受験で必要だから勉強する、英語の資格をとれば給料が上がるから英語学校に通う、といった場合も、この道義的動機づけにあたります。

統合的動機づけと道義的動機づけ

第二言語習得における動機づけに関する研究は、一九五〇年代後半以来、西オンタリオ大学のロバート・ガイドナー(Robert Gardner)を中心にして進められてきました。ガイドナーとその共同研究者の研究は、自分が好印象をもっている外国人に対して共感し、高い価値を与える外国語学習者は、学習対象言語を話す人々とその文化を理解したい、その人々と同じように振る舞いたい、その文化に参加したい、と思ふ傾向が強くなり、それが長期的・持続的な学習意欲につながる、という仮説にもとづいています。ガイド



図2 統合的動機づけ：韓国ドラマ人気で韓国語学習者の数も飛躍的に増えた。写真(は対訳本『冬のソナタ』で始める韓国語』(キネマ旬報社)

手になりたい、という気持ちもありません。『冬のソナタ』などの韓国ドラマを韓国語で楽しみたい、というのも同様です。さらに、自分の好きな外国の歌手の歌をうたえるようになりたい、という「文化的」な動機もあります。

にわとりが先かたまごが先か

ガードナーの研究は、ほとんどが相関関係をみるものです。つまり、質問紙を使って学習者の動機づけ・志向を調べ、その結果と外国語学習の成績の相関をみます。そして多くの研究で、両者の相関が出ています。

しかし、Aという指標とBという指標の相関があるとしても、AがBの原因になっている(あるいはBがAの原因になっている)とはかぎりません。たとえば、子どもの靴の大きさと子どもの言語発達レベルには相関があり、片方が大きくなるにつれて、もう一つも大きくなります。しかし、それは、どちらかがどちらかを引き起こしているわけ

です。

ガードナーとマッキンタイアの一九九一年の実験では、大学生を二つのグループに分け、単語を記憶する作業がうまくいったら一ドルもらえろという条件と、最善をつくすように言われただけの条件で比較したところ、金銭報酬のあるグループのほうが、単語の記憶により多くの時間を費やし、成績もたしかに良好でした。しかし、同時に、金銭報酬のなくなった最後の一回の実験では、金銭報酬のあったグループはそれほど努力をしなくなっただ、という結果も得られています。

その後のガードナーらのフリービンの英語学習者を対象とした研究でも、道徳的動機が重要である、という結果が出ていますし、また最近では、シンガポールの日本語学習者においても、統合的動機よりも道徳的動機が重要である、という結果も出ています。ですから、その言語を話す人々が近くにおまわりしないような状況では、道徳的動機が重要になる、という一般化が可能なのかもしれません。また、英語のようにすでに国際語としての地位を確立してしまっただ言語については、アメリカ、イギリスといった国を越えて、国際的なもの全般に対する興味などが統合的動機に相当するのかもしれない。ただ、ガードナーの論点で重要なのは、道徳的動機づけは外国語学習の成功と結びつくが、その成功は短期的なもので、長期的には統合的動機づけのほうが重要になり、また統合的動機づけはほとんどの研究で外国語学習の成功と結びついている、ということ

ガードナーの初期のカナダにおける研究では、統合的動機づけが重要で、道徳的動機づけはあまり重要ではない、という結果が出ていました。しかし、これはちょっと私たちの直感に反するところがあります。なぜなら、嫌いな国の言語も勉強しなければならぬことがあるからです。かつて日本が占領統治した地域で、日本語による教育を強制した結果、流暢に日本語を話す世代が生まれたことをみれば、道徳的動機だけでも、学習に成功することは明らかです。

pyze)を中心に進められており、今後の進展が期待されます。いずれにせよ、動機づけが外国語学習の成功にとって重要な要因であることは明らかで、日本人の動機づけの弱さがその英語下手の理由の一つであることは否定できないのですが、状況は変わってきているのかもしれない。大きな理由は、経済の国際化です。一三〇年前とは比べものにならないくらい企業の経済活動が国際化しており、日本以外の国と関わりをもつ企業の数が圧倒的に増えています。そして、多くの場合、英語がコミュニケーションの手段として使われています。日本人が韓国人や中国人と話す場合でも英語を媒介とすることが多々あります。今や、ごく一部の社員が英語を使えればいい、というのではなく、ふつうの社員でも英語がある程度できることが期待される企業も多いようです。たとえば、英検などの資格をとると、給料が上がったり、手当がついたり、という企業が増えました。こういう実状をみると、日本国内での英語に関する「動機づけ」がある程度変わってきたといってもよいでしょう。今後、日本人の英語力が向上することを期待できるかもしれません。

けではなく、別の要因(この場合は、年齢・成長といった要因)が両方を引き起こしているのです。また、AとBのあいだの相関は、どちらがどちらを引き起こしているのかわからない場合もあります。それが、動機づけ研究の大きな問題の一つです。つまり、学習という経験がポジティブなものならば、それが動機づけにつながる、ということ。たとえば、英語の成績がよくなったために、英語や、英語を話す人に対する感情が好意的なものになる、というのは十分ありえることです。相乗効果がある、という可能性も否定できません。つまり、動機づけが高いと成績がよくなり、よい成績をとると、それでまた動機づけが高まる、ということ。ただ、ガイドナールは、統計的手法によって、単なる相関があるだけでなく、動機づけが学習の成功を「引き起こしている」と主張しています。このように、動機づけに関する質問紙テストの結果と、外国語のテストの結果の相関をみるのが、それまでの動機づけに関する研究の主流でしたが、これでは実際に動機づけの高さが、学習者のどのような行動につながっているのかがはつきりしない、という批判が出てきました。その結果、動機づけと学習のプロセスの関連をみる研究が一九九〇年ころから盛んになって、ノッティンガム大学のゾルタン・ドルネイ(Zoltan Dörnyei)